
聖地を守れ

へなへなモへナ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

聖地を守れ

【コード】

N6448B

【作者名】

へなへなモへナ

【あらすじ】

ギンと仲間達の聖地が奪われる！？決意を一つに聖地を守れ！！

第一幕 深夜の集会

月の光に照らされた影が一つ、ヒラリと塀を飛び越える。

そのまま音も立てずに地面に着地すると、一度周囲を見回し一呼吸置く。

そして次の瞬間には飛ぶように走り去り、闇へと溶けていった。

身を低くしてあたりを見回し、周囲になんの気配も感じないのを確認する。

十分に警戒を巡らせた後、目の前に口を開けた更なる闇にスルリとその身を入れた。

ここは深夜の廃工場。

今日は月に一度開かれる集会 ではなく、急遽開かれることになった集会だ。

音も無く足を踏み入れ、安堵の息を一つ吐く。

廃工場の中は月の明かりも届かぬ深い闇だったが、彼には大した問題ではなかった。

工場の奥にはいくつもの気配がある。どうやら多少遅れたらしい。

「ようギン、ずいぶん遅かったな」

その声は幾つも積まれた木箱の上から降ってきて、直後に声の主がギンの目の前へ身軽に飛び降りた。

「タスケか……今日はなかなか響子のヤツが寝てくれなくてな」
ギンが肩をすくめて苦笑する。

タスケは一度鼻を鳴らし、呆れた顔を見せながら

「またお嬢か？ ……まあいいさ。もう会議が始まるぞ」

そう言って顎先で工場の奥を示した。

ギンは無言で頷くといつもの自分の場所が空いているのを確認し、その場所に腰を下ろす。

「これで全員揃ったな」

ギンが来るのを見計らったような声が闇の中から上がる。

集会の進行役で、仲間内のボスであるタマキの声だ。

「全員？ まだカイジが来てないぜ」

誰かがそう言った。

タマキはその言葉にゆっくりと頷き

「カイジはしばらく外出禁止を命じた。家の者に怪しまれているらしいからな。そのほとぼりが冷めるまでは」

その言葉に『これで何度目だ？』と、失笑と不満の声でざわつく。「カイジのことはとりあえず置いておいて、今日集まってもらったのは、他でもない x 番地のことだ」

その言葉で周囲のざわつきは収まり、それと同時に緊張が走った。「耳にした者もいると思うが、最近あそこにマンションが建つという噂があった。しかし、それはただの噂ではなく、事実だということが今日はつきりした」

タマキの言葉に再び周囲がざわつく。

タマキの話では、隣街の設計事務所にマンションの設計依頼があったらしい。

そしてその情報は、設計事務所です話になっているタマキの旧友からのもので、非常に信憑性の高いものだという。

「俺たちに無断でふざけてやがる」

「俺たちの縄張りだぞ」

「聖地を荒らされていいのか」

口々に怒りの声を上げる。しかし、その騒ぎをギンの言葉が黙らせた。

「だったら阻止すればいい。ここで騒いでいるだけなら意味ないぜ」
一様に口を噤み、顔を見合わせる。具体的な案が浮かばず、誰も返事をするが出来ない。

その静寂の中、タマキが咳払いを一つ。

「ギンの言う通りだ。今日集まってもらったのは、どうするのか皆

の意思を確認したかったからだ。このまま泣き寝入るをするか
一呼吸置き、ゆつくりと集まった仲間達に視線を巡らせる。」

「それとも、阻止するために戦うか」
タマキの問いかけに声を答える者はなかった。しかし、それぞれの目はすでに答えを出している。

それは鋭く、獲物を捕らえる野生の目だ。

「……決まりですね」

静かに言ったタスケの言葉に、タマキが目を細めて満足そうに頷いた。

「今日は皆の意思確認をしたかったただけだ。戦うには全員の団結が必要だからな。具体的なことは決まり次第報告する。よって、これから今回のように緊急の集会を開くことが多くあるかもしれん。各自そのつもりで待機しておいてくれ」

タマキの言葉に全員が頷く。

それを確認し、タマキは大きく息を吸い込むと声を張り上げた。

「解散っ！」

その言葉を合図に、各々が音もなく四方八方に散っていく。

もちろん、その中にはギンの姿もある。

ギンは廃工場に入るときに通った場所から外に出ると、背中を思い切り伸ばし夜空を見上げた。

空には満天の星と、細い三日月が輝いている。

「……これから忙しくなりそうだ」

そう呟き、月に向かい『ニャア』と一鳴きし、しなやかに走り出した。

全身を覆う体毛が、月の光に照らされてキラキラと輝く……

つづく

聖地を守れ

第二幕 見知らぬ大人

「ただいまあ」

玄関から聞こえた声に、ギンの耳がピクリと動く。

藤枝宅に二階。ギンはお気に入りの窓際でうたた寝をしていた。

ドタバタと階段を上ってくる響子の足音　　響子は藤枝家の一人娘だ。

「ギンちゃん、ただいま！」

響子は勢い良くドアを開けると、ギンを抱き上げておでこにキスをする。響子が帰って来たときの通例行事だ。

気持ち良く寝てる場所を起こされて少し不機嫌だったが、ギンはそんな素振りを見せずにとりあえず『ミヤア』と甘えた声で鳴いておく。

それも通例行事に含まれているからだ。

「今日ね、淳ちゃんが面白かったの。公園でね」

通例行事を済ませて荷物を机に置くと、響子は一日の出来事をギンに話始める。これもいつものことだ。

ちなみに、『淳ちゃん』とは響子の友達で、ラーメン屋の息子である淳平のことだ。

ギンは目を閉じ、ウンウンと頷きながらジッと話を聞いている。

響子は、ギンが話を理解していると、本気で思っているわけではないのかもしれない。

会話がしたいわけでも理解して欲しいわけでもなく、ただ話したいから話すだけだ。

それでもギンは響子に合わせ、人間の思い描く『猫』という生き物らしく、人間の言葉が分からないかのようにしながら、時折ニヤアと鳴いて相槌を打ってやる。

一日の出来事を語りかけてくるのも、自分に対する響子の愛情からだと解釈しているからだ。

『ナナシ』それが二年前までのギンの呼び名だった。

名前の由来は、野良猫で『名前がない』ことだ。

街から街を転々としていたが、この街を彷徨い響子に出会った。

響子はナナシに『ギン』という名前と住む場所を与えた。

始めは戸惑ったギンだが、いつの頃からか『響子の期待を裏切ることはしない』と思うようになっていた。

それは、もちろん感謝の気持ちからだ。

最近多い、家から出してもらえないような連中と違い、外出は自由だし食事も決まった時間にちゃんと出してくれる。

それだけでも十分であり、不満があるわけがない。ただ一つを除いては……

それは名前だ。

毛並みが銀色だからギン。

響子の安直なネーミングセンスだけはなんとかして欲しかったが、タマキのように洒落た名前を付けられながら、『タマ』と呼ばれているよりはまだマシだろうと思って諦めた。

響子のいつもと変わらぬ通例行事の中で、一箇所だけギンの興味を引く部分があった。

それは、淳平たちと公園で缶蹴りをしているとき、見たことがない大人が数人で、公園の隣にある空き地を何やら測っているというもどだった。

その空き地こそ、昨夜の緊急集会で出た x 番地だ。

ギンは夕飯を済ませると、すぐさまタスケの住む五十嵐宅に向かった。

五十嵐宅は藤枝宅のすぐ近くで、タスケが仲間内でもっとも近くに住んでいるからだ。

五十嵐宅に着くと植え込みを潜り、音も無く庭の中へと進入する。そこで何度か細く鳴くと、縁側の窓が開いて大人の女性が顔を出

した。五十嵐家のママさんだ。

「あら、ギンちゃん？」

そう言っしてしゃがんで手を出してきたので、その手に頬擦りをして挨拶をする。

すると、その女性の後ろから黒い毛並みの猫がスッと姿を現した。ママさんは『タスケに会いに来たの？ 仲良しねえ』と言って、窓を多少開けた状態にしたまま中へ戻っていった。

「何だよ、夕飯時にい」

と、タスケがうらめしそくに文句を言う。口の周りはまだ微かに汚れている。

ギンはタスケの抗議をとりあえず無視し、すぐに本題に入ることにした。

「どうやらタマキの情報は間違いないらしいぜ。今日、響子に聞いたんだが……」

そこまで言うと、タスケが後を引き継ぐように口を開いた。

「缶蹴りのときに、空き地で知らない大人が だろ？」

「なんで知ってるんだ？」

「陽一が、帰りが遅くなつた言い訳をママさんにしているとき、そのことを言つてたんだよ」

陽一は五十嵐家の次男だ。

「そうか、陽一も一緒に遊んでたんだな」

ギンは合点のいったように頷く。

「ならば話は早い。響子たちの話が本当なら、設計屋がすでに仕事に取り掛かっているってことだ」

「ああ、出来るだけ早く手を打った方が良さそうだな……」

そう言ったタスケは、前脚で顔を丁寧に掃除する。その様子に慌てた素振りはない。

ギンは明日の予定をタスケと決めると、我が家に帰るために再び植え込みへ向かった。

明日の予定とは、『タスケは明日このことをタマキに報告をしに行く』、『ギンは問題の設計事務所に偵察に行く』という単純な物だ。帰り際、植え込みをくぐろうとするギンに、タスケが声をかけた。「おい、どうしても良いが、次からはちゃんと玄関から来いよ。そんな場所から忍び込んで来たら、まさに泥棒猫だぞ」
タスケはそう言ってさも愉快そうに笑い、ギンは深くうな垂れタメ息をついた……

つづく

第三幕 俺の名は

早朝、二匹が並んで歩いている。ギンとカイジだ。

ギンは響子が学校へ行くのを見送るとカイジの家に向かった。

目的の設計事務所は隣街にある。だがそこへ行くということは他の縄張りに入るということで、一匹で行くには危険があった。

そのため、誰かを一緒に連れて行くと昨夜のうちに決めていた。

とりあえず二匹いればどちらかに何かあっても、もう片方が仲間の元に走ればいいと考えたからだ。

「危険だからってギンの兄貴が俺を頼ってくれるなんて光栄ツス」
歩きながらカイジが目を細めて言ってきた。

カイジは白い毛並みだが、左目の周りだけ黒い。

そのせいか妙に間抜けに見える。

カイジを誘ったのは単純な理由だった。

誘いに行ったときに確実に家にいると分かっていたからだ。

誘う相手に会えないんじゃ元も子もない。

その点カイジはタマキに外出禁止令を出されていたため、家がないという心配はなかった。

それに短い説明で納得してくれる『単純ところ』もカイジを選んだ理由だ。

頼られたと思い込んで嬉々とするカイジを横目で見て、ギンはそれをいちいち否定するのは止めた。

幸せな勘違いならさせておいた方が良い。

「外出禁止のときに悪いな」

「平気ツスよ。タマの親分だってギンの兄貴に頼られたっていろいろな文句は言わないツスよ」

「でも今度はなんで外出禁止を食らったんだ？」

そうギンが聞くとカイジはバツの悪そうな顔をした。

「いやあ……夜な夜な家を抜け出してたら家のママさんがね、どこ

その雌スケに会いに行つてると疑いまして……それで心配して去勢しようかとパパさんと話し合つてたんで、しばらく外に出るのを控えた
いから緊急集会に出れないって言つたんです。そうしたら……」

カイジはそう言つて頭を低くし、上目遣いにギンを見た。

「それでタマキの怒りをかつたのか」

ギンは呆れてカイジを見ると、カイジは「へへへ……」と笑つて
前足で頭をポリポリと掻いた。

「で、実際は夜な夜などこへ出かけてたんだ？」

「いや、実際に雌スケのそこに行つてたツス。でへへ」

「……」

ギンはそれ以上聞くのを止めた。

隣街へ伸びる橋へ差し掛かると二匹は一度歩みを止めた。

「この橋を渡つたらほかの縄張りツスね」

カイジが鼻をヒクヒクさせながら言う。

「ああ、隣街のやつらに出くわしても無視しろよ」

「ういッス。……そういやその設計事務所とやらの場所は分かるんですか？」

「それはまかせておけ」

設計事務所の場合はタスケから昨夜聞いておいた。

タスケは情報収集には長けていて、新しい話ならまずタスケの知らないことはない。

そもそも設計事務所で世話になつていらっしゃるらしいタマキの旧友が情報の発信源なのだから、タマキに聞くのが一番てつとり早かったが、それはしなかつた。

設計事務所に偵察に行くことと決めたのが昨日の今日ということ、時間がなかつたということももちろん理由としてはあつた。

しかしそれよりもタマキに聞いて「無茶をするな」と止められる恐れがあつたから……と、いうほうが理由としては強かつた。

それでもタスケの情報網は見事なもので、設計事務所の場所を確定するだけなら十分な情報をすでに持っていた。

「うえっ」

橋を越えるとカイジが顔をしかめた。

急激に匂いが変わったからだ。

それは他の縄張りに入ったことを意味する。

その変化にギンに緊張が走る。

その時、ギンの視線の端でなにかが動いた。

ギンがその方向を見ると一匹走り去って行く後姿が見える。

ギンたちが橋を越えたのを見て、見張り役がその報告に行ったよ
うだ。

「出来るだけ急いで用事を済ませたほうが良さそうだ」

ギンがそう言うときカイジが無言で頷く。

二匹はギンを先頭に走りだした。

「うゝむ……」

タマキはタスケの話聞いて、茶色のトラ柄をした大きな身体を震わせて低く唸った。

設計屋がすでに仕事に入っているという話よりも、ギンが隣街に向かったというほうがタマキには問題だった。

「まったく若いやつは無茶をする」

そう言ってタマキかじろりとタスケを睨む。

「あのお……やっぱり止めた方が良かったでしょうか？」

タスケが身を小さくして上目遣いに聞いた。

「おまえが止めてもきつと行ったださ」

その言葉を聞いてタスケはホッと胸をなで下ろす。

「でしょうね。そもそもギンは元野良だから協調性に欠けるんです
よ」

タスケはそう言うとき「あっ、もちろんタマの親分は別ですけど」

と慌てて付け加える。

タマキも元野良だ。

「とにかくあの街は危険だ。この街とは違って派閥がいくつもあるせいで縄張り意識がかなり強い。だから勝手な進入者を絶対許さない」

タマキはそう言うと、隣にいる子分に何か耳打ちをする。

子分は頷くとくるりと向きを変え走り去って行った。

「無事だといいが……」

タマキはそう呟くと隣街の方角の空を見た。

何を見てるか分からなかったがタスケも一応同じ方角を見た。

「無事に着きましたね」

設計事務所の前まで来てカイジがゼイゼイ息を荒げながら安堵の声を漏らす。

たどり着くまでに三度絡まれ、二度ほど有無を言わず襲われた。そのどれも無視してひたすら走り抜いてやり過ごした。

「それにしても…無茶なやつが多い…街ツスね」

カイジが必死に呼吸を整えている。

「で、これからどうしましょう?」

一度ゴクリと唾を飲み込むと、ギンを見て訊ねる。

ギンは目の前に立つ建物を見上げ、人はいるか?開いてる窓はないか?それらを注意深く観察したが、そのどちらも期待通りとはいかないようだった。

今後のことを考え込んだほんの数秒後、後方からの声で2匹の身体がビクツと跳ね上がった。

「ここにいたぞ」

塀の上から叫んでるやつがいる。

考え込んでいるうちに周囲の気配から気がそれてしまっていた。

ただぼーっと突っ立っているだけだったカイジに文句の一つも言い

たかったが、そんなヒマも無いうちに周りを囲まれてしまった。

数で七、八匹…カイジだけでもなんとか逃がすか…

ギンはそう考えたが、塀を背にして囲まれているためにそれすら難しそうだ。

頭を低くし、腰を上げてしばらく睨み合っていると左前方の二匹がスッと道を開けた。

その間から灰色の毛並みに黒のトラ柄のある猫が現れて、悠然とギンたちに歩み寄ってくる。

目つきはかなり鋭い。

「いかにも悪そうなやつツスねえ」

カイジがギンに耳打ちする。

「おまえたちか？俺たちの縄張りに勝手に入ってきてるのは」

目つきの悪い猫が、少し顔を上げて見下ろすように言ってくる。

「カー！ああいう見かたをするやつって自己陶醉型が多いツスよ」

カイジが小声で言っただ顔をしかめる。

「なんだ？口が利けないのか？それとも恐くて話すこともできないか？」

後半部分は仲間の方を振り返り言っている。

他のやつらがまるで事前練習していたように、一斉に同じ笑い方をした。

カイジの言っていることは普段あまりアテにはならないが、今回の分析だけは当たってそうだ。

「おまえたち隣街から来たんだろ？タマ一家か？」

一家という呼び方にギンは思わず吹き出しそうになる。

「おまえたちはなんだ？訊ねるときは自分から先に言え」

ギンは相手を睨みつけたまま答えた。

その台詞に、自己陶醉猫は一瞬不快な顔を見せたが、すぐに余裕の表情に戻る。

「フン、俺の名はリン。このあたりを仕切ってるキラ一家のNO2

だ」

リンはのけぞって自信満々答えるが、どうしても一家という呼び方がギンには笑えてしまう。

「で、おまえたちはタマ一家か？」

リンの質問にギンは相手を小馬鹿にする顔を見せ

「俺たちはタマと愉快な仲間たちだよ」と返す。

その言葉にリンが、馬鹿にされたと気付いたようで顔を歪める。

「タマのこのやつなら黙って返すわけにはいかねえ。やっちなえ」

その言葉を合図に他の連中がギャーオと唸りながらさらに身を低く構えた。

「はわわわわ!!」

カイジが慌てたようにギンの後ろに隠れる。

リンの仲間が一斉に飛びかかろうとするそのとき……

「こつちよ!!」

背にした堀、その一ブロック分に突然穴が開いた。

ギンは迷うことなく、自分の後ろにいたカイジの首筋をくわえ込むと、そのまま穴に飛び込みカイジを中へ引きずり込んだ。

目の前の出来事にリンたちは呆然と立ち尽くしていた。

第四幕 伝説の猫

ギンとカイジはキッチンにいた。

リンたちに襲われかけ塀の穴に逃げ込んだ。

塀の一角にある穴は猫用の通路になっていて、開閉が出来るようになっていたのだ。

それを内側から開けて救ってくれた者の家、そのキッチンに二匹はいた。

「いやあ、それにしても塀の穴を閉めるときに見たりんってやつ顔、ありや愉快でしたね。ポカーンと口を開けて間抜面してましたよ」

カイジが肩を揺らして笑う。

リンたちに襲われかけたとき、慌ててギンの後ろに隠れたとは思えない言いつぷりだった。

カイジがそんなことを言っているとテーブルの上から一匹の三毛猫が下りてきた。細身でしなやかな身体をしている。

「さあ、どうぞ。つまらないものだけど」

そう言って三毛猫はテーブルの上から取ってきたであろうマグロの刺身を数切れ差し出した。

「いやあ、助けてもらった上にご馳走にまでなっちゃって申し訳ないッスね」

そう言つとカイジは口の周りを一舐めしてさっそく喰らいつく。

「あれえ、ギンの兄貴はいただかないッスか？」

口を付けないギンを見てカイジは怪訝そうにするが、ギンはその三毛猫から視線を動かさなかった。

ギンは元野良のせい、生まれたときから飼猫のカイジより遙かに警戒心が強い。

「あらヤダあ。あなたみたいな素敵な若者にそんなに見つめられたらお姉さん照れちゃうわ。ウフン」

そう言っただけで身体をクネクネ揺らす。

ギンはそんな三毛猫の態度もまったく気にしない。

「なんで助けてくれたんだ？ここに住んでるならこの街を仕切ってるリンたちの前で、俺たちに手を貸すのは得策じゃないぜ。余計な恨みを買つかもな」

その言葉にクネクネがピタリと止まる。

「疑い深いのねえ……。野良育ちでしょ？」

「……」

ギンが無言でいると三毛猫は一度フウーっと深いため息を付いた。

「あなたたち隣の設計事務所を見てたでしょ？で、リンたちとの会話を聞いてたらタマの名が出たから」

「それでなぜ？」

「あなたたちタマに設計依頼の話聞いてきたんでしょ。タマにその話を教えて上げたのがあたしなの。どう？信用した？」

「タマキが言っただけで旧友ってのがあんたか？」

「うい！」

ギンの問いかけに身体をそらせて目をつぶり頷く。

「……タマキの旧友とやらは設計事務所です世話になってるって聞いたぜ。設計事務所の隣の家じゃない」

ギンは隣の家という部分を強調して言った。

「本当に疑い深いわねえ……。いい、あなたも言ったように隣は設計事務所なの。家じゃないの。っていうことは設計事務所の持ち主が住んでる場所は他にあるわけ。それがこの家。どう？お分かり？」

少タイライラしながら言うてくる。

「……」

ギンはもう一度相手を凝視するが、どうやら嘘を付いてる感じではない。

「分かったらそれ食べておとなしく帰りなさい。どうせこの街にはタマに言わずに来たんでしょ？ここはあなたたちの街より危険なの。余所者が二匹でブラブラしてたらまたさっきのような目に会うわよ」

すでに自分の分をたいらげたカイジが不安そうな目をギンに向ける。

「残念だけど、危険な目に会ったからこそ手ぶらじゃ帰れない」

ギンのその言葉に三毛猫は深いため息をつき首を何度か左右に振ると、意を決したようにギンを見つめ返す。

「分かったわ。じゃあ一つ情報をあげる。そのかわり……」

三毛猫がギンに持ちかけた話は次のものだった。

まず、設計事務所はあくまで依頼を受けただけであって、マンション建設を止めたいなら依頼主をどうにかするべきだということ。

そしてその依頼主の家を三毛猫が知っていること。その家に今から案内するかわり、今日のところはおとなしく帰ること。

「分かった」

ギンがその持ちかけに応じたのを確認すると、三毛猫はもう一度深いため息を吐いた。

しかしギンたちを交互に見ると諦めたように向きを変える。

「じゃあ行きましょ」

そう言って三毛猫がキッチンを出ようとするとき、ギンはまだその三毛猫の名前すら聞いていないことを思い出した。

「そういえば世話になって名前すら聞いてなかったな。俺はギン。

こっちはカイジだ」

ギンがカイジに顔を向けるとカイジはペコリと頭を下げる。三毛猫は振り返り二匹を交互に見て目を細めた。

「キヨン。あたしの名前はキヨンよ。よろしく」

その名前を耳にした瞬間、カイジの身体がビクリと跳ねた。

「キヨン？タマの親分の知り合いでキヨンて……」『サバ缶のキヨン』
ツスか！？」

「あら、ずいぶん古いこと言うわねえ」とキヨンが嫌な言葉を聞いたような表情をする。

『サバ缶のキヨン』その名はギンも何度か聞いたことがあった。

ギンが街に来る前、まだタマキが今の地位に着いたばかりの頃に、

決して群れることがない一匹猫がいたらしい。

その猫の名が確か『キヨン』だ。

猫望の厚さはタマキが上だったが、実力だけならキヨンが上だったと言う者もいる。

キヨンの武勇伝は星の数ほどあり、得意とする強烈な猫パンチはサバの缶詰を一撃で粉碎したらしい……

そこから付いた通り名が『サバ缶のキヨン』。

しかしある出来事をきっかけにタマキたちの街から去って行った。半ば伝説と化している猫が目の前にいる。

ギンはその話を耳にするたびに、筋肉質な巨躯の猫を想像したもののだが、実際目の前にいるのは……

「まあ昔の話よ。今は『麗しのキヨン』とでも呼んでちょうだい」
そう流し目で言って、スタスタとリビングを出ていく。

伝説の名の効果は絶大だったようで、ギンとカイジも母猫の後を追う子猫のように、慌ててキヨンの後を追ってリビングを出た。

第五幕 炸裂！再起不能…

タマキは焦っていた。

ギンとカイジが隣街へ行って半日以上が過ぎた。まだ二匹が戻ったという情報はない。

「遅い。遅すぎる……」

タマキが低く唸る。

「本当にどうしちまったんだ」

隣のタスケも頭を抱える。

設計事務所の前で二匹が隣街のリンに襲われたという情報は掴んだ。

しかしそれ以降は……。

この街一番と言われるタスケの情報網を持ってしても足取りを掴むことは出来なかった。

「でも、おいらの耳にも情報が入らないってことは、リンのやつらも足取りは追えてないってことですよ」

タスケが遠慮がちにオズオズと言う。

「だと良いが……」

タマキがため息まじりに答えた。

聖地を守れ

「お兄ちゃん。聞いてるの？」

女の声がする。

「ああ、聞いてるよ。でも今さら何なんだ？」

男の声が返事をする。

「お母さんが怒るわ」

「はん！バカなことを。あの世で怒ったからってなんになるって言うんだ」

「あの土地はお母さんが大事にしてたのに」

「大事にしてた？あんな草だらけでか？おまけに野良猫ばかりだったじゃないか」

「お母さんは猫好きだったから……」

「お袋は猫相手に土地を貸してたって言うのか？猫が土地代を払うか？バカバカしい。使わない土地ならさっさと売るか、使えるようにするかをすれば良かったんだ」

「だからってあたしに黙って勝手にマンションを建てるなんて」

「おまえも賛成したじゃないか」

「それは別の土地だと思っただからよ」

二人が睨み合いを続けている。

その部屋の奥、窓の外に小さな頭が三つ並ぶ。

「うつう…ギンの兄貴い…この体勢はつらいッス」

「黙ってる」

「本当に根性ないわねえ」

ギン、カイジ、キヨンの三匹だ。

三匹は窓枠に前足をかけて、アゴを乗せてぶら下がっている。

キヨンの案内でマンション設計の依頼主の家に来たときに、この部屋から声が聞こえたのだ。

そうして現在の格好に至る。

「くッ…兄妹みたい…ッスね」

カイジがぶるぶるしながら言ってくる。

「ああ、兄貴の方が依頼主みたいだな」

ギンが涼しい顔で答えた。

「ほら、妹が出て行ったわよ」

そのキヨンの言葉で、三匹が一斉に窓枠から降りる。

ギンとキヨンは壁を迂回し、急いで玄関に向かった。

ツカツカツカ！バン！ブロロロ！ブーン！車で妹は走り去って行ったようだ。

「いちいち行動に怒りが滲み出てるわね」

キヨンが呆れたように肩をすくめて言う。

二匹で妹が去るのを見送ると、カイジが送れて二匹のもとにやって来た。

「これから…どうしますか？」

「猫がなんて格好してるんだ」

ギンはカイジを見て呆れる。

カイジは前脚がしびれているらしく、二足歩行でヨタヨタしながら寄って来たのだ。

「あなたたち約束よ。今日はもう帰りなさい。」

ギンも今回はキヨンの言葉に素直に頷いた。

依頼主の顔は覚えた。家も分かった。

現状でこれ以上ギンたちに来ることは無い。

帰ってタマキたちと策を練るつもりだ。

「じゃあまた危険な目に合う前にとっと帰りましょう」

カイジの言葉にギンが苦笑いをしたそのとき……

「みつつけた」背後から聞き覚えのある声を掛けられた。

ギンとカイジが声をそろえる。

『リン！！』

「よう、やっと見つけたぜ」

ニヤニヤと嫌な笑いを浮かべると背後に合図を送る。

その合図と同時に周囲からぞろぞろとリンの子分たちが集まってきた。

その数は前回囲まれた数の比ではなかった。

ギン、キヨン、カイジの三匹が身構える。

「絶対絶命みたいね」

キヨンの軽口に返事をする余裕がギンにもない。

「おまえたちが何をしてるか知らないが、そんなことはどうでもいい。おれたちの街で勝手をするやつは見逃せねえ」

ジリジリと間合いを詰めてくる。

ギンは『やるしかない』と覚悟を決めて、ちらりとカイジとキヨンを見た。

怯えるカイジ。何を考えているか分からないキヨン…

「本当に伝説の猫なのか？」

キヨンを見て小さくため息を付く。

次の瞬間…

一斉にリンたちが襲い掛かってきた。

一匹目の猫パンチを後ろに飛び退いてかわし、すかさずカウンターの猫パンチを叩き込む。

反撃もつかの間、後ろから違う一匹に飛び付かれる。

他の二匹を気にする余裕はすでない。

一瞬、カイジは無事か気になったが見ることさえ出来ない。

だが偶然リンの姿がギンの目に飛び込んで来た。

リンの子分が、背後からキヨンに襲い掛かるうとしている。

それを頭で理解するより先にギンは走り出していた。

リンの前脚がキヨンの背後から振り下ろされる直前、ギンはキヨンに覆い被さるようになっていた。

「ぐっ！」

ギンの背中に激痛が走る。

周囲の時間が止まりキヨンの声だけが響く。

「ギンちゃんーん！！」

バタリとその場にギンが倒れた。

そしてそれを見下ろすリン。

「けっ、バカなやつだ」

慌ててキヨンとカイジがギンに駆け寄る。

「兄貴い！兄貴い！しっかり」

カイジの呼びかけにも痛みで返事が出来ない。

キヨンはわなわなと身体を震わせている。

その震える背中にリンが言葉を投げかけた。

「なんだ？ビビって震えてるのか？」

そう言ったリンの表情が、キヨンが振り返ると同時に凍りつく。「ブツ殺すっ!!」

キヨンの顔は怒りに歪んでいた。

「ななな…何だよ!」

悲鳴に近い声を上げながら、後ずさりをするリン。

キヨンが間合いを詰めたそのとき…

「っ!!ギヤフン……」

それがリンの出した声だった。

リンの身体は、三回転半しながらきれいな弧を描き地面に落下した。

誰もが目の前で起きたことが理解出来ずに呆然とする。

ただカイジの声だけが響く。

「ででで出たあー!サバ缶すら粉碎する伝説の再起不能パンチ!

」!

仁王立ちのキヨン。

その前方でリンは白目をむいてピクピクしていた……

第五幕 炸裂！再起不能…（後書き）

うとう…初めてご意見いただきました！

ありがとうございます！

最高にハッピーな気分です！！

聖地を守れ

第六幕 絆

街灯の明かりに照らされる道を三匹の猫が歩いていた。

「うっ……」

「ギンの兄貴い…大丈夫ツスカ？」

リンに受けた傷が痛み、少しよろめいたギンをカイジが心配そうに覗き込む。

「本当に大丈夫？でもあたしを守るために飛び込んだギンちゃん…素敵だったわぁ」

キヨンが照れたように身体をクネらせる。

ギンとカイジはそんなキヨンを白い目で見た。

「あんなに強いなら誰が助けに飛び込むか！」

そんな不満をギンは飲み込んだ。

リンたちに襲われ窮地に追い込まれた三匹だったが、キヨンの強烈な一撃で全ては終わった。

キヨンはリンを吹き飛ばすと、ギンの首をくわえて堂々とその場を去った。

その間、リンの子分たちに動ける者はいなかった。

困惑と恐怖で呆然と見送っただけだ。

その後、キヨンの家でリンから受けた傷の痛みがある程度治まるまで待った。

おかげですっかり日が落ちてしまっていた。

「さあ、ここまできれば大丈夫ね？」

街境の橋まで差し掛かったときにキヨンが言った。

「すっかり世話になったな……」

ギンがそう言うとキヨンはモジモジと身体をクネらせた。

「いいのよ……ギンちゃんとあたしの仲じゃない」
潤んだ目でギンを見つめる。

「どんな仲だっ！」と突っ込んでやりたくなつたが止めておいた。
さすがにリンのようにはなりたくはない。

そのときキヨンが橋の向こう、ギンたちの街の方をみて声を上げた。

「あら？何かしら」

キヨンの見る方向に目をやると猫の集団が猛烈な勢いで走ってくるのが分かる。

「ん……あつ！あれタマの親分たちツスよ」

カイジが言うとおり、集団の先頭を走りギンたちに向かってくるのはタマキだった。

タマキたちは近付いてくると次第に走る速度を落とし、ギンたちの前で止まる。

「おまえたち……無事だったのか」

タマキは肩で息をしながらギンとカイジを交互に見た。

「タマキ……そんなに急いで何してるんだ？」

「バカヤローツ！おまえたちがリンに襲われたっていつからこうして仲間を集めてきたんだ」

もちろん聞いたギンにもそれは分かっていた。

しかし、嬉しさと照れ臭さからそんな聞き方をしてしまう。

「はは、年寄りが無理するな」

ギンが目を細める。

「なんだと！」

肩でまだ息をしながらタマキが目を吊り上げた。

「まあまあ、無事なら良かったじゃないですか」

タスケが慌てて間に割って入る。

「結果オーライ、バックオーライってね？」

タスケに白い目を向け、全員がため息を付き首を左右に振った。

「すっかり仲間が世話になったみたいだな」
タマキがキヨンを見る。

「いいのよ」
キヨンもタマキを見る。

しばらく二匹はお互いを見ていたが、結局交わした会話はそれだけだった。

タマキとキヨン…過去には争いあった二匹。

しかし、ある出来事をきっかけにキヨンが街を離れた後も親交を持つ二匹。

そんな二匹には他の者には推し量れない絆があるのだろうとギンは思う。

タマキが振り返り頷くと、それを合図に全員が来た道を戻り始めた。

歩きながらギンは振り返りキヨンを見た。

「伝説の猫か……」

その呟きが聞こえたのかカイジが寄ってくる。

「オレ言ったツスよね？家のママさんに去勢うちされるかもって……」

「ああ……」

「オレもああなるツスかね……」

「……」

それには答えず、ギンは無言でキヨンを振り返る。

視線の先では最狂にして最強と恐れられ数々の伝説を残しながら、去勢されたシヨックにより街を去った悲しいオス猫が、身体をクネらせ笑顔で力いっぱい前脚を振っていた……

深夜の廃工場。

ギンたちの情報により設計依頼主の顔と家は分かった。

キヨンとの別れから二日。明日、明朝より作戦は決行される。ギンは響子のことを考えた。

作戦の準備に追われ、結局は隣街へ行った朝から帰っていない……心配しているだろうか？泣いているだろうか？そう考えたがギンは頭を振った。

必ず聖地を守る！そうしたら真っ先に帰ろう。

そう決意すると夜空を見上げる。

そこには満天の星空が広がっていた……

第七幕 一難去って…

「はぁー…」

斎藤一郎は会社の喫煙室で憂鬱そうに大きく肩で息をした。

「どうしたんですか？」

心配そうに隣で声をかける部下の顔を、覇気のない目で見返す。

「聞いてくれるか？」

一郎はそう言って、手に持つコーヒーの入った紙コップに目を落とす。

「はい」そう返事するとゴクリと唾を飲み込む。

部下は一郎の表情から余程のことが起きていると思ったようだ。

「実はな、朝からおかしなことがあって……」

「おかしなこと？どんなことですか？」

「……」

聞いて欲しいと自分から言いながらも躊躇する。

「どんなことですか？」

大きなトラブルか何か…言いづらい内容なのだろうと察し、部下はわずかに語気を強くしてもう一度聞いた。

一郎はそう言われて決心したように頷く。

視線は紙コップに落とされたままだ。

「朝から数えて四回も黒猫が俺の前を横切ったんだ」

「??？」

部下は拍子抜けしたような表情をする。

「四回だぞ？四回。普通そんなに通勤の間だけで黒猫を目にするか？しかも必ず立ち止まって俺の方を見るんだ」

「……」

部下は何と言っているかわからない。

「それだけじゃない。車を運転していたら急に猫が飛び出してきた、轢ひいたと思って車を降りたら猫なんて居やしない。そんなことが二

回もあつた。通勤の間だけでだぞ!？」

最後の部分をことさら強めて言う。

「……で、なにが言いたいんですか？」

「おかしいと思わないか？」

「まあ、おかしいと言えばおかしいかもしれませんが……」

そこで一度言葉を切り、部下は困った顔を一郎に向ける。

「偶然じゃないですか？」

偶然？出勤の間だけでそんなに猫がらみのことが続いているのか？

一郎はそう思うが、部下の言っていることも分かる。

一郎自身も普段であればその程度のこと、多少おかしいとは思っても『偶然』と片付けてしまつたろう……しかし……

先日、マンション建設の件で、妹が家に文句を言いに来たときのことを思い出す。

「お母さんは猫好きだったから」「お母さんが怒るわ」

……まさか……

いや、そんなバカなことがあるか!!

バカな考えを振り払うように頭を強く振って、一気にコーヒーを喉に流し込む。

「どうかしてるな」

「きつと疲れてるんですよ」

一郎は苦笑いすると紙コップをゴミ箱に入れ、部下の肩をポンポンと二度叩いた。

「忘れてくれ。さあ、午後の商談に遅れたら困る。そろそろ出よう」

「はい!」

部下も立ち上がり、二人で午後の商談について話しながら喫煙室の出口に向かった。

そのとき一郎は不意に背後から視線を感じて振り返ったが、視界に入ってきたのは窓と窓から見える一本の樹木だけだった。

「ここは二階だぞ。本当に疲れてるのかもな……」

そう呟いて、もう一度苦笑いすると再び歩き出した。

「目標が動いたぞ」

樹木の枝に乗っているタスケが下に向かって叫ぶと、下で待機していた一匹の猫が走り出した。

「へへへ、まだまだこれから」

そう言うのとヒラリと地面に飛び降り、タスケも走り去っていった。

「そんなバカな…そんなバカな……」

一郎はそう呟き、夜の帰路を走る車のハンドルを震えながら握っていた。

部下と午後の商談に出かけるため、営業車の停めてある駐車場に行ったときに驚くべき光景を目にした。

営業車の上に乗るで待ち構えたかのように、身体の高い茶色いトラ柄をした猫が陣取っていたのだ。

いや、その猫だけではない。

その猫を頂点にして、ボンネット、トランク、タイヤと営業車の至る所に十数匹の猫が乗っていた。

猫の群れは部下が追い払ったが、猫たちは去り際に『ギヤアアオオ〜!』と一斉に威嚇してきたのだ。

部下も「ほら、車って暖かいですから」と笑って言ったが、さすがにその笑顔が引きつっていた。

どうやら部下もその異常さに恐怖を感じたらしく、その後は一切猫たちのことは触れて来なかった。

そんなこともあり、午後の商談はひどいものだった。

ソワソワと周囲を気にするばかりで、相手の言っていることは全く耳に入らない。

気分を損ねたのは明確だろう。

散々な商談を終え、会社に戻った後も周囲を警戒しすぎて営業車から降りることが出来なかった。やっと降りて社内に入ると、今度は恐くて外に出れない。

早く帰りたいが帰るのが怖い…この矛盾と格闘してるうちにすっかり遅い時間になってしまった。

ちなみに部下は会社に戻ると、それからは一郎に一切近寄って来なかった……

「うわあー!!」

叫びながら一郎が急ブレーキを掛けた。

道路脇から銀色のような物体が飛び出してきたからだ。

猫？また猫か？

帰りだけで何度急ブレーキを掛けたか分からない。

「いや、俺は何も見えない。何も見てない」

まるでお経のように何度も呟き、子供がイヤイヤをするように頭を振る。

もう降りて確認する気はさらさら無い。

早く帰りたい…ただそれだけを考え、力いっぱいアクセルを踏んだ。

道路脇から銀色の猫が顔を出す。

タイヤを鳴らしながら、慌てて逃げ去る車のテールランプを見て満足そうに頷いた。

「やっと着いた……」

ゼイゼイ息を荒げて周囲を見回した。

周囲は静寂に包まれている。

ホッと胸をなで下ろして車のエンジンを切る。

しかしなかなか車から降りることが出来ない。
しばらくハンドルを握ったままジツとしていると、意を決したように飛び出す。

車のロックを掛け、まるで死を覚悟した突撃兵のような勢いで、わき目も振らずに玄関に駆けよる。

慌てた手つきで鍵を解除しドアに手を掛けたそのとき…

横から無数の猫が恐ろしい鳴き声を上げながら向かってきた。

ドアを開ける余裕もなく、一郎は叫びながら走り出した。

そのとき書類を投げ出していたがそんなことすら気付かない。

ただひたすら夜の道を走った。

しばらく走ると息が切れて立ち止まり、恐々と後ろを振り返る。

とりあえず猫の姿は見えない。来た道を引き返す気にはなれず、

迂回して家に戻ることにした。

家の近くまで戻ると、電柱の後ろに隠れて玄関付近を確認する。

そこにも猫の姿はなかった。

今度は一郎自身が猫のように足音を殺しながら玄関に近づく。

書類が落ちているのを見て、やっと自分が書類を投げ出していた

ことに気付いた。

慌ててそれを拾い集め、玄関のドアを開ける。

家の中は暗闇と静寂に包まれている。ピトン……ピトン……かす

かに水の落ちる音が聞こえる。

しばらく後ろ手でドアノブに手を掛けたままジツとして、それで

も何の気配もないと分かれると安心して鍵を掛けた。

ひどく喉が渴いた。

水を飲もうとキッチンに向かいドアを開けるが、そこでもまだ安

心が出来ない。

ドアに手をかけたまま中を覗き込むが、暗くて中がよく見えない。

しかしとりあえず大丈夫そうだ…

やっと安心してキッチンの電気を手探りで付けた。

しかし次の瞬間……

「ヒイッ!!」

電気が点くとキッチンの床一面に、血だらけになった無数の猫が横たわっている。

一郎の意識はそこで途切れた……

妹の陽子は一郎の家に向かっていた。

マンション建設についてももう一度兄と話し合うためだ。

一郎の家に着くと彼の車があることを確認する。

どうやら帰っているようだ。

車を止め、玄関へ行き呼び鈴を鳴らす。

「……」

しばらく待ったが返事がない。

「おかしいわね?」

そう首を捻ると、バックから鍵を取り出しドアを開ける。

「??」

廊下の奥、キッチンの明かりが点いているのを見て不信に思い声を掛けた。

「お兄ちゃん。居るの?」

「……」

また返事がない。

何かあったのかと思い、恐る恐ると廊下を進む。

そしてキッチンにたどり着いて目にしたのは…大の字で気を失う兄の姿だった。

「お兄ちゃん!!」

陽子は慌てて駆け寄り、身体を揺ると一郎が薄く目を開けた。

「陽子?……おまえどうして?」

弱々しい声で陽子に問いかけてくる。

「どうしたもこうしたもないわよ!大丈夫なの!?!」

そこで一郎は我に返り、ハッと目を見開く。

「猫が……床に大量の猫の死骸が……」

一郎は腕を上げ、前方を震える手で指差した。

「??? 一体なにを言っているの?」

一郎が指した方向を見て陽子が首を捻る。

その顔は困惑している。

陽子の態度を見て、一郎も恐々（こわこわ）と頭を持ち上げて覗き込む。

「!! バカな……」

「お兄ちゃん…本当に大丈夫なの?」

キツチンの床には猫の死骸どころか、まるで舐め取ったかのようにチリ一つ落ちていなかった。

「……」

「お兄ちゃん!!」

呆然とする一郎を見て陽子がもう一度呼びかける。

「…おまえの言った通りだ…母さんが怒ってるんだ……」

「一体何があつたの?」

「……マンション建設は止めるよ……」

その言葉を合図のように、二人が背にした廊下をゾロゾロと無数の影が玄関に向かって歩いて行った。

しかし二人はその気配に全く気付かなかった……

「いやあ、大成功ツスね!」

カイジが意気揚揚と言う。

「フツ」先頭を歩くタマキが小さく笑った。

「あのビビリ方したら逆に気の毒になりましたね」

タスケが肩を揺らして笑う。

タマキ一行は夜の道をぞろぞろと歩いていた。

全員が身体中を血に見せかけたトマトケチャップでベタ付かせていたが、皆満足そうな表情と誇らしげな足取りだった。

ギンはそんな皆の姿を見て妙に嬉しくなった。

作戦が成功を収めたこともそうだが、何より全員で団結した一体感が心地良かった。

野良生活のときにはもちろんだが、きつとタマキと出会って仲間に誘われることがなかったら、こんな満足感は一生涯得られなかっただろうと思う。

そつとタマキの顔を見る。

歳を取ってはいいるが、その横顔には威厳と誇りが感じられる。

「あんたは凄いよ」

ギンは声には出さずにそつと心の中で呟いた。

もう少して街境の橋に差し掛かるうとするとき『それ』は来た。

よく言う『二度あることは三度ある』というやつだ。

「は〜い、ご苦労さん」

それは聞き覚えのない声だった。

ギンたちの足が止まる。

前方では無数の猫が道を塞いでいた。

その端にある電柱の上から、その聞き覚えのない声は降ってきたようだ。

電柱を見上げると、電柱の取っ手の部分にリンと子分が一匹上っていた。

リンはまるで事故にあったように、アゴから頭の天辺にかけて包帯を巻いている。

リンがなにか隣にいる子分に耳打ちをする。

部下は何度か頷くと

「おまえたちが何をしているかは調べさせてもらったぜ」

どうやらリンは口が利けないらしく、隣にいる子分が代わりに言っている。

勘に触る口調はそっくり真似ているが、聞き慣れない声なのはそ

れが原因らしい。

「バカなやつらだ。のこのこ全員揃ってこの街まで来るなんてなあ。おまえたちが守った物は、ここでおまえたちを倒して、縄張りごとこのリン様が頂いてやるよ」

リンの口調を真似た子分の言葉に合わせて、リンが自分を親指で差している。

「…なんかホント面倒臭いやつツスね」

その光景を見てカイジが言った。

言いたいことを言い終えたのか、リンが両足をバタつかせながら、下にいる子分たちに手を借りて地面に降りてきた。

「…なんだあいつは?? 笑いを取りにきたのか?」

タマキが呆れたように言った。

「一匹で降りることが出来ないなら、何でわざわざあんな所に上ったんだ?」

そんなタスケのもっともな疑問にギンが答えた。

「あいつは『可哀相なやつ』なんだよ」

「なるほど……」

その言葉を最後に、両軍が威嚇の声を上げながら低く身構える。

縄張りを賭け、誇りを掛けた戦いが今幕を開けた……

第七幕 一難去って…（後書き）

話も終わりに近づいてきました。
楽しんでくれてる方は居るのでしょうか…

聖地を守れ

第八幕 安息の場

街境付近、深夜の道端で両軍は睨み合う。タマキとその仲間たち。リンとその子分。最初に動いたのはリンたちだった。

リンの合図にその子分が一斉に襲いかかる。それを見て瞬時にタマキも合図を送る。

ギンたちはそれに呼応し、リンたちの攻撃に応戦する。

まさに両軍入り乱れた総力戦だった。

脚を噛まれる者、顔を引っ掻かれる者、それぞれが必死に身体を動かす。

「タマキを狙え!!」

リンの子分がリンの代わりに叫ぶ。

リンはその子分の隣でタマキを指差している。

その言葉を聞き、ギンはタマキを探した。

「!!」

タマキは数匹の猫に囲まれていた。

タマキを囲むリンの子分たちが一斉に飛びかかる。

しかしタマキに動揺する気配はない。

背中に一匹を背負いながらも、数匹の猫を一撃で吹き飛ばす。

「さすがだな」

ギンはこんな状況にも関わらず、思わず笑みをこぼしてしまう。

「この野郎!この野郎!」

タスケが塀に上り、下から向かってくるリンの子分たちに猫パンチを繰り出す。

「はわわ、はわわわわ」

カイジが逃げ惑っている。

どうやら戦況はギンたちに不利なようだ。数で圧倒されている。

そこへ近所のオバちゃんが、懐中電灯を片手に通りかかった。

「あんねえ…猫がこんなに…発情期かね？」

そのオバちゃんの言葉に全ての猫の動きがピタリと止まる。

『ギャギャギャツッ！！（オス同士だ）』

一斉にオバちゃんに威嚇すると、オバちゃんは小さく悲鳴を上げ、懐中電灯を放り投げて逃げていく。

そして乱闘が再開される。

「このままじゃ全員ヤラれるぞ！」

タマキに近づきギンが声をかけた。

タマキは一度周りを見渡すと、なにかを決意するように頷きギンを見た。

「おまえがリンを倒せ。リンまでの道は俺が作ってやる」

タマキの言葉でギンはリンを探す。

リンは子分たちの最後尾にいた。

ギンはもう一度仲間たちの状況を見る。

どうやら迷っているヒマはなさそうだ…

タマキを見て強く頷き

「ジジイが無理するなよ」と声を掛けた。

タマキは口の端を上げて小さく笑うと、咆哮ほうごうと共にリンに向かい走り出した。

「リンさん！タマキの野郎が向かってきます！」

子分が指す方向にリンが目を向けると、タマキが巨体を震わせ猛烈な勢いで向かってくるのが分かる。

子分たちがそれを止めようとするが、ことごとくタマキに吹き飛ばされる。

「止める！そいつを止める！」

リンがモゴモゴと口を動かして言っている。

その甲斐あつてか、タマキの突進も徐々に勢いを弱めていき、リンの目の前まで来てその歩みを子分たちに止められた。

「けっ！無駄だったな」

リンが口をモゴモゴさせながら吐き捨てる。

その台詞を聞いて、肩で息をしていたタマキがニヤリと笑って言った。

「それでもないぜ」

次の瞬間……

「リーントッ！！」

ギンは叫びと共に、立ち止まったタマキの背を踏み台にして子分たちを飛び越え、リンに襲いかかった。

リンの驚く表情が見える。

その顔に渾身の力を込めて猫パンチを繰り出す。

リンはなんとか直撃は避けたがダメージはあるようだ。

怒りで顔が歪んでるのが包帯越しにもよく分かる。

体勢を立て直してリンが飛び掛ってくる。

二匹は組合って道路を転げ回った。

リンは大口を叩くだけあつてなかなかの腕前だったが、先日キヨから受けたケガと、先ほどギンから受けたダメージのハンディを持っては勝てるわけがない。

「もらった！！」

ギンがそう思ったとき、横からリンの子分に組み付かれて倒れたしまった！

視線を上げるとリンが前脚を振り下ろそうとしている。

「言っただろ？進入者は許さないって」

そうモゴモゴ言つてリンが不敵に笑う。

ヤラれる！！ギンはそう覚悟して目をつぶった。

…

…

…

しかしリンは攻撃してはこなかった。

「リンさん何してるんですか!」

組み付いてきているリン子分の声でギンは目を開けた。

前脚を振り下ろしてくるはずだったリンは、なぜか地面に向かってピョンピョン飛び跳ねている。

その姿はまるでハンティングの練習をしているようだ。

「何って…身体が…勝手に…この…待て!」

そう言いながらリンは跳ね回る。

リンの足元を見ると、そこには丸い何かが忙しく動いていた。

「ギンの兄貴い!チャンスっすよ!」

声が出た方向を見ると、それはカイジだった。

塀に上りカイジが何か叫んでいる。

隣ではタスケが何かをくわえ、頭を左右に振っていた。

タスケが口にくわえている物…それはさっきオバちゃんが放り投げた懐中電灯だった。

タスケはその懐中電灯の灯りでリンの足元を照らし、それを動かしていたのだ。

リンは必死でその灯りを追いかけている。

リンの行動、それは悲しい猫の本能だった。

ギンは状況を把握すると、組み付いているリンの子分を振りほどき、すぐさまリンに駆け寄る。

今度は外さない!

ギンの猫パンチはリンのアゴ、先日キヨンに再起不能パンチを食らったのと同じ場所に的確にヒットした。

それは会心の一撃だった。

「ギャウ」っと声を上げて大の字に倒れるリン。

そしてそれを見下ろすギン。

倒れたリンにギンは言い放つ。

「俺もおまえに一つ言っておいてやる……」

そう言っただけ大きく息を吸うと

「仲間に手を出すやつは許さねえ!!」

勝敗は決した……

「ご苦労だった。今日はこれで解散にする。各自ゆっくり休んで、明日の正午に聖地に集合してくれ」

タマキの声でそれぞれが散っていく。

リンが倒れた後はあつと言う間に決着がついた。

リーダーを失った子分たちは逃げ惑い、クモの巣を散らすように去って行った。

リンは子分の一匹が引つ張っていったようだ。

ギンはカイジ、タスケと家路を歩いていった。

「いやあ、タマの親分の背を飛び越えていったときのギンの兄貴

…格好良かったツスよ!」

カイジが目を輝かせて言っている。

「……」

いつもくだらないことを言うはずのタスケは無言だ。

「なんだ? 疲れたのか?」

ギンはそんなタスケに声をかけた。

「ん? いや、リンを倒せたのはオイラの奇策のおかげなのに…と

思ってたな…ハハ…ハハハ」

タスケの笑顔が引きつる。

そんな話をしているうちにギンの家が見えてきた。

ギンは二匹と顔を擦り合わせて別れの挨拶をし、二匹を見送ると

我が家の二階を見上げた。

数日帰らなかっただけだが、ひどく懐かしく感じる。

本当にここは自分の『家』なんだなと実感した。

しばらくそうしている自分 came 来た道から誰かが来る…タマキだ。
「タマキ…どうしたんだ？」

タマキはギンに近寄ってくると一度大きく息を吐いて言った。
「まったく、歳を取ると若いやつに追いつくだけでも一苦労だ」
タマキの言葉にギンも笑顔を見せる。

「で？どうしたんだ？」

「いや、大した用じゃねえ。ここがおまえの家か？」

タマキがギンの家を見上げて言った。

「ああ…」

ギンも我が家を見上げた。

そうして二匹でしばらく黙っていると、タマキが口を開いた。

「どうだ？仲間に誘って良かったろ？」

ギンはそう聞かれると、返事はせずに照れ臭そうに笑ってうつむいた。

タマキはそれを見て満足そうに笑うとクルリと向きを変える。

「じゃあな…」

「??わざわざそれだけを言いにきたのか？」

ギンが首を捻る。

「ああ、それだけだ」

「おかしなヤツだな」

そう呆れたように笑うギンを背にタマキが去っていく。

「おい！タマキ！」

ギンが慌てて呼び止めると、タマキは頭だけギンに振り返った。

「…なんだ？」

「…いや…なんでもない」

「ありがとう」

ギンはその言葉を照れ臭くて、素直に口に出すことが出来なかった。

タマキは一度小さく頷くと再び歩き始めた。

タマキの後ろ姿を見送り、それが見えなくなるともう一度二階を見上げる。

？不意に二階の窓、響子の部屋の窓が開いていることに気付く。ギンの飼い主の響子は一見気が強く見えるが、実はかなりの恐がりだ。

そんな響子がこんな時間に窓を開けたままにしているとは…？

「無用心だな…」

そう苦笑いすると、ギンは玄関にある猫用の出入り口から家中に身を入れた。

家の中は静まり返っている。

音を立てぬように注意を払って二階に上がり、寝床にしている響子の部屋のドアが、いつものようにわずかに開いているのを確認してそこに向かう。

部屋に入るとベッドの上で、響子が規則正しく寝息を立てている。いつものようにベッドに潜り込もうとしたとき、響子が寝ながら何かを大事そうに両手で握りしめているのに気付いた。

「これは……」

それはギンがいつも響子の『相手をしてやる』ときに使う、鈴の入ったボールだった。

よく見ると響子の目頭から頬にかけて、赤くカサ付いているのが分かる。

泣いていたのかもしれない…そう思い窓を見る。

「俺のために開けていたのか……」

ひどく恐がりの響子が、自分のために窓を開けておいた。そう思うとギンの胸に熱いものが込み上げる。

この数日間が長い時間を感じた。

だが響子にとっては、自分が思うよりも長く感じたのかもしれない。

不意に視界が歪み、鼻がツーンする。

聖地を守れ

それを慌てて堪^こえると、ギンは響子の頬を舐めてそっとベッドに
潜り込んだ。

そこは『安らぎ』『といつ名の温もりがあった……

最終幕 聖地

空では太陽が最も高い位置に達しようとしている。

「ギンの兄貴い〜」

カイジがギンを見つけて駆け寄ってくる。

二匹は顔を擦り付け一通りの挨拶を済ますと肩を並べて歩き出した。

「いや〜、昨日はビクビクして家に入ったツスよ」

カイジは数日前まで、夜遊びが問題で去勢される恐れがあった。

「でもいざ家に入ったら、こっちが拍子抜けするくらいママさんが優しくてね。なんか心配してたみたいで。デヘ〜…」

やたらとデレデレした顔を見ると、心配され、優しくされたのが余程嬉しかったのだろう。

「こんなことなら数日家を空けるのも悪くないツスね！」

去勢にビクついてた数日前から見たらえらい変わりようだ。

「ギンの兄貴はどうでした？お嬢さんは心配してました？」

「まあ…多少はな」

ギンはそう答えたが、実際は多少どころの騒ぎではなかった。

響子が目を覚ますと、苦しいくらいの抱擁が待っていた。

わんわん泣きながら力いっぱい抱きしめられたからだ。

その泣き声は、両親が何事かと慌てて二階に駆け上がって来るほどだった。

そんなわけで朝から三人に頭を散々こねくり回されて、首の骨が折れるかと思つたほどだった。

二匹がしばらく歩いていると土手が見えてきた。

土手を上ると眼下に聖地が広がっている。視線を走らせると、もう少し土手を進んだ所に仲間が集まっていた。

タマキはまだ来ていない。

どうやら二匹は遅れたわけではなさうだ。

タマキがまだ来ていないことは、その姿を探さずとも分かる。

誰も聖地に下りていないからだ。

聖地はタマキの許可無くして入ることは許されていない。

これは仲間内での暗黙のルールだ。

二匹が近づいて行くと、「よう」と口ぐちに挨拶をして顔を擦り付ける。

だいたい挨拶を済ますと、ギンは仲間の顔を見渡した。

誰もが多少の傷を付けてはいるが、とりあえず皆元気そうだ。

タマキを待つ間、各々が昨日の話をして盛り上がっていたが、時間が経つと共に表情に変化が表れ始める。

タマキが来ない……

約束の時間を過ぎようとしているのに一行にタマキの姿が見えないのだ。

誰もがただならぬ雰囲気を感じ始めた。

タマキは誰よりも時間に厳しい。

今まで約束の時間に遅れることなどなかった。

その場にいる誰もに不安がよぎり始めた。

しかし、結局タマキは約束の時間には現れなかった。

そう言えばタスケもない。

仲間内がざわつき始める。

そのとき……

「よお、遅れて悪かったな」

そう言いながら土手を上ってくる一匹の猫。

「タスケ……」

その場にいる全員が声を揃えた。

しかし、やはりタマキの姿はない。

「どうなつてんだ!？」

「タマの親分は!？」

タマキのことを口にしながら全員がタスケに詰め寄る。

「まあまあ、落ち着け」

そう言つてタスケは自分が来た方向を振り返る。

タスケが来た方向を全員が見ると、もう一匹の猫が土手を上つてくるのが見える。

その猫は…

「キヨン!！」

ギンが驚きの声を上げた。

その言葉を聞き仲間たちにも驚きの声上がる。

「キヨンを…サバ缶のキヨンか？」

「あれが？伝説の？」

「間違いねえ、キヨンだ…」

「どうゆうことだ…？」

この街を去つたはずのキヨンの突然の登場に余計に混乱が走る。

キヨンはギンたちの元に近づいてくると、ゆっくりと静かに、しかしハッキリとした口調で言った。

「タマキはここには来ないわ…」

キヨンの言葉に全員が石のように固まる。

「どどどど、どうゆうことツスカ!！」

カイジが誰よりも早く口を開いた。

それをきっかけに他の者も騒ぎ出す。

「お黙りなさいっ!！」

そう一括すると、ゆっくり全員を見回し、再び口を開く。

「タマキはもうこの街にいないの。姿を消したのよ……」

キヨンの言葉は次第に小さくなり、最後は聞き取れないほどだった。

「なっ…」

なぜ？ギンはそう言いつつもりだったが言葉が出なかった。
気付いたからだ。

キヨンは確かに最後『姿を消した』と言った。
『姿を消す』それは猫社会にとって、すでに忘れかけられた、しかし本能の奥底では忘れることのない言葉だった。

猫が『姿を消す』…それは…死期を悟ったときだ……
すでに消えかけた本能だが、それは猫にとっての誇り、死に様は見せぬ誇りだ。

そしてタマキは誇り高い猫だ。
誰よりも誇りと威厳に満ちている。

その場にいる誰もが意味を悟り、口を利くことが出来なかった。
ギン同様に本能で言葉の意味を理解し、ただうつむく者、嗚咽を漏らす者と様々だ。

ギンは隣街に行った日、タマキが街境の橋に仲間を連れて駆けつけてくれたときのことを思い出した。

あのときタマキの呼吸はひどく荒かった…

いや、そのときだけじゃない。なにか行動を起こしたときのタマキはいつも呼吸が荒かった。

「！！！」

ギンは愕然とした。

だから昨日わざわざ俺を追ってきたのか？別れの挨拶だったのか？それと同時にもう一つのことにも気付く。

昨日の帰り道、タスケの様子がおかしかったのは疲れたからじゃなく、あの時点でタスケは知っていたんだ！

そう思いタスケを見ると、ギンの視線に気付いたらしく目を逸らした。

間違いない……

そんな身体でタマキはリンへの道を作ってくれたのか？

リンの子分たちに突進する力強い後ろ姿と、家の前で見送った歳老いた後ろ姿が重なる。

「バカヤロー……」
ギンはそう力なく呟いた。

「なっ……」

「まだ新参者の部類だぜ」

「他に適任はいないのか」

その声でギンは我に返った。

「どれだけボーっとタマキのことを考えていたか分からないが、まったく話は聞いていなかった。」

「？なっ……なんだ？」

みんながギンを見ていた。

「ちよつとおく、聞いてなかったのお？」

キヨンが口を尖らせて言ってくる。

キヨンの言葉に続いて、タスケが少し茶化すようにに言う。

「おいおい、しっかりしてくれよ。おまえが新しい親分なんだからな」

「……」

ギンはタスケの言っている意味が、瞬まばたき二回分ほどの時間、理解が出来なかった。

「なに！？俺が親分？」

「だからそう言ってるじゃないの」

呆れてキヨンが肩をすくめる。

「おまえが後を継ぐってというのが、タマの親分の最後の指示なんだよ」

タスケがニヤついて言う。

「そう。で、あたしがギンちゃんの後見猫になるのを、昨日の夜中タマキが頼みに来たわけ」

キヨンが嬉しそうに言う。

「……」

そうか！昨日の夜、タマキがわざわざ追って来たのはこっちが理由か！

「あのクソジジイ……だったらそう言っていけ！」
そう声に出し毒づく。

「決まりね。私が後見猫になったからには誰にも反対させないわ！
キヨンがそう身体をクネらせながら言うと、一斉に不満の音が上がる。

「余所者は引っ込んでろ！！」
「勝手に決めるな！」

それを見てタスケがため息をつく。

「まあ、仕方ないわな……どんなに伝説の猫でも、今はただのオカマ猫グボオワア……」

タスケの身体は、言葉が言い終わらぬうちに木の葉のように宙に舞った。

その場にいる全員の視線がタスケの行方を追う。

タスケは転がりながら土手下に落ちていく……

キヨンの一撃が炸裂したのだ……

「……」一同沈黙

「うわぁー！！タスケの兄貴いい！！」

慌ててカイジが土手を駆け下りていく。

「ひでえ！ひでえよおお！！誰かぁ、誰か来てくれ！わぁーっ！！
泡ふいてるう！早く誰かぁ！！」

慌てるカイジとピクピク痙攣するタスケを尻目に、キヨンがもう一度言った。

「あたしが後見猫になったからには誰にも反対させないわ！」

「……」

「……」

「……」

パチ！パチ！パチ！パチ！！

多少の間があったが、今度は満場一致で拍手が鳴った。

拍手をする皆の顔は必死そのものだ。

「……」

ギンは何も言わない。

キヨンに関してはもう驚かないし、何も言わない。

「さあ、ギンちゃん！親分になつての初仕事よ！」

キヨンが満面の笑みで頷く。

ギンは苦笑いし首筋を掻いた後、息を大きく吸い込んだ。

「さあ今日は聖地を守った記念だ！皆存分に楽しんでくれ！！」

『ニヤアア~~~~！！』

一斉に喜びの声を上げると、全員が土手を駆け下り聖地に向かう。キヨンはそれを目を細めて見送ると、ギンの側にやってきた。

「これから大変よ。リンたちの件があるから……リンたちの親分もこのまま黙ってないわ。それに新米親分だと、何かとちょかいを出してくるやつらもいるでしょうし……」

ギンはその言葉に笑顔を返した。

「大丈夫……力を合わせりゃなんとかなるさ！！」

ギンはそう言つと聖地に向き直り、飛ぶように土手を駆け下りた。

聖地……

その場所では大量のマタビが風に揺れていた……

最終幕 聖地（後書き）

聖地を守れ、終了です。

いかがだったでしょうか？携帯で読む人が多いようなので、『長過ぎず』を心掛け、削ったエピソードが多数あります。

削ったエピソードなどは、もしやる気が起きれば別の機会にでも書こうかと…もちろんそんな物は、読んでくれる人がいなければ意味がありませんが…。

ここまで読んでくれた人、ありがとう

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6448b/>

聖地を守れ

2008年11月7日08時38分発行